

出来事と人々が織りなすもの：空間の成り立ちを 巡って

長谷, 千代子
九州大学

<https://doi.org/10.15017/2344786>

出版情報：九州人類学会報. 41, pp.2-4, 2014-07-09. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

セッション A

出来事と人々が織りなすもの：空間の成り立ちを巡って

長谷千代子（九州大学）

I はじめに

本稿は 2013 年度九州人類学研究会オータムセミナーのセッション A「出来事と人々が織りなすもの：空間の成り立ちを巡って」における各報告とコメント、質疑応答を踏まえた総括である。

セッションのテーマは、ある種の非日常的な空間（聖地、舞台、巡礼、特殊な景観…）が成立・持続する条件について考察することであった。柳田國男は「幻覚の実験」で、自らが少年時代に「白昼、星を見た」と言っただけで信じてもらえなかったエピソードと、同様に不思議な体験が幸運にも周囲から信じられて御堂の建立に至るなどの事例群を並べて、「その根柢をなしたる社会的条件は、甚だしく幽玄なもの」と述べる。この幽玄なる社会的条件を明らかにするため、このセッションでは出来事とそれに関わる人々の実践に着目し、ある特定の場所を基盤として織り上げられる「歴史」や「景観」、「場」などを、条件次第では別なものになり得た、可塑性に富むものとして見つめ直すことを試みた。

ある種の非日常的な空間をめぐる議論としては、最近では観光地化との関連から、聖地の成立過程についての研究が増えつつある。聖地に対する主な観点は、場所がすでに聖地としての特徴を具えていて、それを人がいかに利用するかという聖地ありきの見方と、人が聖地を作り出すという構築主義的な見方と、その両方の契機をバランスよく取り込もうとする重層決定論的な見方に大別できる。しかし、そのいずれの観点も、聖地が成立している状態へ向かって予定調和的に有効な説明を組み立てがちになる傾向をもつ。柳田のいう幽玄なる社会的条件は、現状理解のために有効そうな説明だけを取捨選択する研究者の作為によっていっそう見えにくくなるように思われる。

幽玄な社会的条件を、そうした説明に還元しないとすれば、他に考えられる見方ないし説明方法としては、そのときに居合わせた人々の個性（の記述）、偶然性の確率論、タイミングや時代性（歴史叙述）などを考慮に入れる必要がある。これらは、ある種の出来事が起こって展開する間じゅう、環境の中に可能性としてつねに潜在する。そのように潜在するものを、出来事と人々がすでに織り上げた「歴史」「景観」「場」それに「ハビトゥス（対象についての本質主義的な見方や態度）」のなかから掬い上げるような記述を目指すのが、本セッションの目標であった。

II 各報告の概要

「畏怖と場所を考えるための一試論：沖縄離島の事例から」（後藤晴子）では、幽霊の日撃談やある土地における不幸の出来事をめぐる沖縄離島の人びとの実践を通して、ごく私的な恐怖の出来事によって印づけられ、認識される場所のあり様が描き出された。畏怖と場所をめぐる問題については、無意識

(恐怖)の保存の問題や自然／人間の関係と場所をめぐる恐怖の語られ方の問題、近代における場所性の恐怖から非場所性への移行などさまざまな視点から行われている。なかでも柳田國男による恐怖をめぐる一連の議論はこれらの議論の端緒である。柳田は心意の領域を解きほぐす手がかりとして、恐怖と笑いを取り上げており、そこでは恐怖の記憶が場所の記憶となることや私的な「幻覚体験」が実践化される点について示唆している。調査地におけるさまざまな畏怖をめぐる事例においても、人びとの「畏怖」の経験のあり様は、対象も含め多様である。その経験の多くは柳田のいうところの「漠然とした」「幻覚」の体験や伝聞に基づくものも少なくない。また当人にとっては「印象的な出来事」であっても、他者にとっては「衝撃的な出来事」ではない。「漠然とした」「私的な」畏怖の出来事によって、場所が色づけられ、人びとのふるまいに変化がもたらされる。ここには、土地の可塑性の要因としての畏怖のあり様を認めることが出来る。

「龍神の夢：新しい社をつくる人々」(関一敏)では、福岡市西区の小戸公園内に近年現れた妙見神社の十数年前からの成立過程が紹介された。発端は何人かの人々が2003年頃までに前後して竜神の夢を見たことで、それが現われた場所を小戸公園のある場所と信じた人々がそこに龍神社を建立し、その後も毎月一定の日に多くの人々が参拝し続けることで神社となりつつある。夢の話だけで終わっても不思議ではなかったが、その場所に神聖な歴史的由来を見いだす人、お宮として承認する神主、参詣する人々などが連鎖的に現われることで、神社としての場の生成が起こったのである。

「聖地空間の『おもてなし』をめぐる一考察：サンチャゴ・デ・コンポステラを例に」(内藤順子)では、カトリックの聖地サンチャゴ・デ・コンポステラが全世界から多くの巡礼者や観光客を受け入れる一大聖地であるという共通認識とその事実をうけて、その「聖地であり続ける場の日常」を描くことを通して、聖地空間が現在進行形で成り立っているさまと条件が考察された。具体的には、「余所者にとって非日常的な空間」を日常として住まう人びと(聖地の住人)と、余所者(巡礼者や観光客)と、余所からやってきて居つく者(一時的もしくはそれなりの期間におよぶ移住者)のそれぞれが織りなす関係性についてである。たとえば、彼らはきわめてグローバル化の進んだ状況下で出会っている異教徒どうしとしてお互いの事情に通じあったウイトに富んだやり取りをしたり、聖ヤコブを崇敬してやってきたわけではないが長い道程を歩いた果てにその達成感からヤコブ像をうっとり眺める巡礼者を微笑ましく思う聖地住人がいたり、巡礼としてやってきたがそのまま居ついて巡礼を迎える側になったそのやむを得ぬ事情や想いを吐露したり、といった様ざまのアクターによって日々繰り返される「巡礼経験」の詳述から、現在の聖地の姿の一端が明らかにされた。さらに、このような現実的な人間関係が織りなされるなかにおいて、ある種の「聖性」としかいいようのない現象もまた、語られ、感じられてそれがネットを通して流布している。そのような現代的な聖性のありかたと、聖地が聖地であり続ける理由とは無関係ではないであろう、との含みを残した。

「今津人形芝居の舞台はいかに成立するか：遊び・文化・教育」(長谷千代子)では、人形芝居の舞台を成立させてきた社会的条件はなにか、それが明治から今日までのあいだにどう変化したかに焦点を当てた。民俗芸能は柳田・折口以来、神事のなれの果てという視点から研究されることが多かったが、その論理を突き詰めていけば、「原初」の状態ではすべてが信仰であり、遊びは一つもなかったことに

なってしまう。したがってここでは「遊び」こそ広いすそ野を持つ基底的现象であり、その一部がその時の社会的条件に応じて「宗教」「文化」「教育」などの色彩を帯びるという観点を採った。その視点から見てきたのは、1960年ごろまで、浄瑠璃語りの愛好者があちこちに存在し、舞台も手作りで各村ごとに建てられるような遊びの潜在力があったのが、その後は人形芝居が非日常的な伝統文化に祭り上げられ、芝居を上演する舞台が小学校の体育館や公共施設に限定されるようになるという変化だった。定期公演とその場所の固定化は、人形芝居のための場所が確保されたというよりもむしろ、日常生活の延長線上にいろんな場所に舞台を立てることのできる遍在的な遊びの土壌が失われた結果と見る事ができる。

Ⅲ 総括

これらの報告に対し、コメンテーターの川田牧人は、落語「黄金餅」の語りを引用しつつ、聖地のような特殊な場所の成立と持続には、その場所についての何らかの語りの更新が連続して起る必要がある可能性を指摘した。その語りは一見代わり映えしない繰り返しのようなものであっても、語る者の日常的感觉を取り込みながら、本人が必ずしも意図しない形で場所の意味を少しずつ塗り替えていく。その効果が、聖地の成立や持続、時には消失といった現象を下支えするのである。

これに対し、フロアーからは「セッションの趣旨がまったく分からない」という厳しい意見も飛び出し、その後は研究動機の告白大会のようになったのは残念なことだった。個人的には、土地や場所のあり方をかなり自由に作り変える力を手にした現代人にとって、「聖地（特に、人為的に安易に作り変えてはならない土地）」が、どういうものとしていかに成立するのか、という問題意識があったのだが、コーディネーターの力不足のため、会場全体で共有できる問題として提示できなかったことを反省している。（敬称略）

（2014年6月28日 原稿掲載承認）